

ハイエクの市場理論とその方法

越智保則

(1997年9月10日受理)

目次

1. はじめに
2. 経済計算論争
3. 近代社会の複雑構造
4. 無知とその適用
5. 競争と価格
6. 個人主義とスミス
7. 市場分析の根本問題
8. むすび

1. はじめに

ハイエク (Friedrich von Hayek) の市場理論への初めての寄与は, 1920-30年代に始まる。彼が, その際, いわゆる「経済計算論争」の一方の論客として, ランゲ (O. Lange) やラーナー (A. Lerner) に対抗し, ミーゼス (Ludvig von Mises) とともに「社会主義における経済計算の不可能」を論じたことは有名である。しかし, 戦後の50-60年代のブーム期に, ハイエクはケインズとその学派の隆盛の陰に隠れ, ほとんど省みられることはなかった。そして, 彼の市場理論が再び注目を浴びるに至るのは1970年代に一層深刻化するスタグフレーションの中においてであった。彼は, そこで戦後福祉国家のコンセンサスを終焉させる執行人としての役割を演じた。また, 80年代末のソ連・東欧の「現存社会主義」体制の崩壊と急激な「市場化」政策の中で, 彼は市場と競争の旗手としてたびたび脚光を浴びることになる。

こうした時代状況のなかで, とりわけハイエクの社会分析の方法と市場理論が示した諸命題は時代の困難な諸問題の解決に有効な指針を提供するものとして英米を中心に大きな関心呼び起こした。「人間の無知」や「人間の利己心」の強調を

基礎とするハイエク独特の方法論はケインズ主義の「設計主義」という方法論の欠陥を突いただけではない。「社会的知識の限界が, 社会政策の限界を示す」との見地にたったハイエクの「再分配国家」批判の「説得力」が70年代以降の新保守主義による福祉国家攻撃に非常に有力な論拠をも提供したのであった。¹⁾そして, 1980年代末のソ連・東欧の共産主義体制の崩壊である。この歴史的衝撃は, ハイエクがその主要な論客となって「社会主義は可能か」を争った1920-30年代の「経済計算論争」のリアリティーをにわかに蘇らせただけでなく, 主流派経済学の均衡論的市場理解に対するハイエクの競争論的市場理解の新鮮さを世界に印象づけたのであった。²⁾

こうして, 70年代以降の世界的な政治経済の激動のなかでにわかに時代の寵児となったハイエクの方法論と市場論においては, 現代のグローバルな市場化と競争化といった政策潮流を理解することは不可能であると言っても過言ではあるまい。そこで, この小論では, 戦後のハイエクの市場理論と方法論に照明をあて, その特質と意義について検討することとした。

2. 経済計算論争

市場についての自分の考えを論じるにあたって, まず最初に新古典派あるいは主流派経済学の理論的欠陥を攻撃することから始めるのがハイエクの流儀である。しかし, 初めからそうであったわけではない。もともとハイエクは, その経済理解において, メンガー (Carl Menger) に始まる「オーストリア学派」の中で, また当時の経済学者に共通の枠組みであった限界革命というパラダイムの中で育った。それ故, この学派と新古典派経済学との相違は曖昧であったし, またハイエク自身「アングロアメリカ経済学」にたいし近親感さえもっていたといわれる。(ギャンプル)

だが、このころすでに両学派の間の差異は漸次拡大する傾向にあった。つまり、1930年代のいわゆる「経済計算論争」を契機として、ハイエクは新古典派やケインズ派の経済学のイデオロギーや方法に不信感を抱くようになる。その理由は、ギャンプルが詳述しているように、「経済計算論争」においてO・ランゲやA・ラーナーのような経済学者たちが新古典派の経済理論を社会主義擁護のために利用したということ、また、新古典派と共通のパラダイムの内には、「社会主義の不可能」を主張するミーゼスを擁護することができないことに気づいたことにある。こうして、ハイエクは、新古典派やケインズ派のいわゆるアングロアメリカ経済学との対決を余儀なくされたのである。それがどのようにしてかについての詳細は別稿に譲るほかないが、ここでは後の議論のために主にラスキ&ブルスおよびギャンプルの整理を簡略に紹介するにとどめたい。³⁾

「経済計算論争」の発端はミーゼスの1920年の論文「社会主義社会における経済計算」に始まるとされる。ミーゼス論文の目的は、「マルキシズムと将来の社会主義社会の隠された空想性」(ギャンプル)への攻撃にあった。その中で、彼は、生産手段の私的所有の廃棄と生産財の真の市場の欠如を理由に、社会主義における経済計算の理論的可能性を否定した。ミーゼスのこの主張は、しかし、マルクス主義の理論家たちによってではなく、社会主義にシンパシーをもった新古典派の経済学者たちによって取り上げられた。

その中心メンバーは、O. Lange, H. D. Dickinson, F. Talor, A. Lerner らであった。彼らは、社会主義経済の理論的可能性の証明のために近代経済学の分析用具の利用を試みた。

とはいえ、ミーゼスの挑戦に最初に応えたのは、二人の新古典派の非社会主義的経済学者である V. Pareto とその弟子であった E. Barone であった。ギャンプルによれば、パレートがその完成に助力した新古典派の「一般均衡モデル」における根本的経済問題は希少性問題であり、この問題の解決方法は「競争的市場」の機能にあった。つまり、「競争的市場」は、多数の行為者たちの競争をつうじて最低コストに基づく一組の諸価格を成立させ、それが全ての行為者が彼らの優先順位とトレード・オフについての合理的計算を行うことを可能にし、利用可能な諸資源と諸テクノロジーによって課された諸制約のなかで、消費者の満足を極大に導く。パローネは、その主観的価値の見地から、このモデルを利用して「社会主義は

理論的に可能である」ということを証明した。つまり、経済行動の論理は、財産所有権の形態から独立していること、希少性問題の解決は、生産省が全ての諸商品のための一組の諸価格を設定すれば、社会主義経済でも達成可能であること、したがって集産主義体制における生産は資本主義のもとでのいかなる生産とも異なっていない、というのがそれである。ミーゼスの攻撃に対する反駁としてもっとも有名であったのはオスカー・ランゲの『社会主義経済理論』であったが、それが証明しようとしたことは、「中央計画局」が経済活動を誘導するために市場過程と一組の諸価格を設定できれば、社会主義経済においても合理的資源配分は達成可能である、というものであった。

ギャンプルによれば、社会主義経済のもとでの合理的経済計算についての理論問題は存在しないとのパローネやランゲのこうした判断の根底には、「諸市場は現実には常に不完全であるが故に、社会主義経済は実際には新古典派経済学の諸モデルに一層近づくことができる」という仮定があり、また、彼らがそうした判断に使った新古典派経済学には1)「需要と供給の一般的均衡」、2)「完全競争」、3)生産諸要素の完全雇用を伴う「十分に弾力的な一組の諸価格」という与件が前提されていた。ランゲらは、こうした仮定と与件を前提として、「新古典派経済学の洞察で武装した中央当局は、資本主義下で成長した計画化されない市場秩序を改善する市場システムを設計できる」、このシステムにおいては「中央計画局が個々の市場行為者たちが欠く全経済についての情報をもっている」が故に、「計画化されない資本主義の価格システムはおそらく効率においてそれに劣るであろう」と考えたのである。(Gamble, P.66)そして、ランゲのこうした仮定と与件自体がハイエクによる攻撃の標的になることは、後に見る通りである。

ところで、この論争へのハイエクの最初の寄与は、ランゲへの反論を書いた『集産主義経済計画論』であったが、その中で、彼はオーストリア学派が新古典派経済学の諸仮定をなぜ拒否するかについて詳論し、同時に彼のもっとも永続的な社会科学への寄与となる知識論をも展開した。(Gamble, P.67) その際、ハイエクが、ランゲに提出した「難問」は、ブルス&ラスキによれば、「資本主義の生産効率を改善しつつある、あるいは少なくとも悪化させないと言う意味で、社会主義は有効であり得るか」(ブルス & ラスキ, 82頁)と言うものであり、それに対するランゲの回

答は「明確なイエス」であった。ランゲの「解法」は、「完全競争は経済における一般均衡の状態に導く」とされる「経路の一つ」を記述した「ワルラス・モデル」を基本的に継承するものであった。(同上、83-4頁)

シュームペータは、この論争はランゲらの勝利に終わったとかつて回顧した(『資本主義・社会主義・民主主義』)が、しかし、ブルス&ラスキによれば、ランゲはハイエクによって提起された「難問」と対決する上で、決して成功しなかった。というのも、ランゲの解法には「指令経済の代替肢」についての考えを発展させ、「希少性を反映する価格なしの合理的資源配分の可能性」に対する「伝統的マルクス主義的信仰」がいかに根拠薄弱かを示す「利点」もあったが、「旧システムの欠陥」の積極的な解決のための適当な理論的基礎を欠いたからである。こうしたランゲの新古典派的立場からするオーストリア学派への反駁に対し、ハイエクがどのような反批判を展開したかについては、後にハイエクによる新古典派経済学との対決について関説するところで詳論する予定である。ただここでは、新古典派経済学が社会主義擁護のためにどのように利用されたかということ、および新古典派と共通のパラダイムの内にはこの論争で「社会主義の不可能」を主張するオーストリア学派のミーゼスを擁護できないと気づいたということから、ハイエクの新古典派経済学との対決の全てが始まったということを確認することで十分であろう。

3. 近代社会の複雑構造

こうして、自らの市場論の展開をまずは新古典派経済学の欠陥の批判から始めるのがハイエクの流儀となったが、同時に新古典派の欠陥のなかに集産主義への危険をただちに見て取ることもこれまたハイエクの通例となる。そして、ギャンプルは、ハイエクのこうしたやり方の原因は一部政治的・イデオロギー的だが、第一義的に方法論的であると述べている。前者によるハイエクの新古典派批判は、彼の経済学への寄与が「経済計算論争」での社会主義との対決に始まり、しかもこの論争で新古典派理論が社会主義を擁護する論敵によって利用されたという経緯と無関係ではない。いずれにせよ、「真の個人主義と偽の個人主義」⁴⁾の冒頭で、彼が自ら信奉する思想を「個人主義」と呼ぶ理由について、「社会主義という言葉が個人主義に対する反対を言い表す」ためであると

か、「私が以下とりあげるのは社会主義とは二者択一的な体系である」(『市場・知識・自由』第1章)と語っているように、ハイエクは自らの思想体系がはじめから社会主義との対決をめざすものであることを些かも隠さない。その意味で、彼の新古典派との対決ははじめから政治的・イデオロギー的であった。そこで、ハイエクが、社会主義批判と新古典派批判を結合して自らの市場論をどのように展開するかを次に見ていくことにする。

ハイエクが市場について繰り返し強調している点は、市場の競争が創り出す近代の自生的秩序の構造の複雑さとその進化論的生成の意義であった。ハイエクによれば、「近代社会の構造が熟慮の組織が達成し得たものをはるかに越えるある複雑さの程度を達成したのは、それが…自然発生的に成長してきたからである。」⁵⁾ハイエクは、その際、このことを社会構造が複雑化しすぎたが故に、計画化しなければならないとする「左翼の誤った逆説」としてではなく、個人的自由と交換的正義の法の支配のもとでの文明の進歩の現れとして示そうと試みる。彼はそのために近代社会の特質の分析を「つくられた秩序」としての「組織」と自然発生的に生成した「自生的秩序」という二つの秩序概念の峻別から始めている。そこで、ハイエクは前者の「組織」を家計や企業や共同体のような人間理性の慎慮によって「つくられた秩序」とし、また後者の「自生的秩序 spontaneous order」を自然発生的あるいは進化論的に形成された秩序として示し、それぞれの経済的基礎を「厳密な言葉での経済 (economy)」と「市場秩序 (market order)」と呼び、とりわけ後者を「財産、不法行為、契約」と言った法の範囲内で成立し、「多くの交錯した諸々の経済 (組織) のネットワーク」から成り立つものと述べた。

ハイエクが、このような概念的区別をなさなければならなかったのは、彼が経済学の集産主義的濫用を阻止するためには、古い共同体に根ざす集産主義の社会形成原理と近代の市場秩序の社会形成原理との同一化あるいは混同を許さない両者の排他的異質性を明確にする必要を感じたからである。「自己増殖的または自生的秩序と組織とは別物であり、その際それらを支配する二つの異種のルールもしくは法に関係づけられる。今日一般に「社会的正義」または「分配的正義」と見なされているものが、この種の秩序の第二のもの、すなわち組織の範囲内でしか意味をもたず、アダム・スミスが「大きな社会」と呼び、カール・ポパー

卿が「開かれた社会」と呼んだ自生的秩序のなかでは意味をもたず、全くそれと両立しないのである。」(Hayek, 1973, P.2, 9頁)

ところで、ハイエクによれば、家計や企業のような「つくられた秩序」である「経済」は「あるものが統一的な目的秩序に諸資源を慎重に配分するような組織、あるいは組み合わせ⁶⁾」である。つまり、それは、上位者の「知性」と意思あるいは共同体の「共通の目的」に基づき、また上位者あるいは共同体の「命令」への構成員の「服従」によって成り立つ単純で、具体的な秩序の特質を持つ。そして、ハイエクによれば、この「つくられた秩序」としての「経済」の概念こそ、設計主義的合理主義者やあらゆる社会主義者が依拠した社会秩序の形成原理なのであるが、(Hayek, 1973, P.36, 49-50頁)、ポットモアも指摘しているように、この社会形成原理はいかにも「東欧におけるスターリニズムの現実から引き出されるイメージ⁷⁾」というほかない全体主義的なものであり、ハイエクの集産主義への嫌悪の反映とも言えるかもしれない。

それでは、市場のような「自生的秩序」の特質はどうか。ハイエクによれば、それは「諸目的のヒアラーキーによる組織」とは関係なく、自然発生的に発展した「無数の個人的な経済諸調整からなる複雑な構造」(Hayek, 1978, P.182)をもつ秩序なのである。つまり、この秩序は私有財産と広範な分業・交換に基づき、自らの部分的知識とおもいおもいの目的に基づく市場の競争者たちの多様な行動の「意図せざる結果」として成り立つ。このようにハイエクは近代市場社会の特質を「無数の個人的経済調整」からなり、「複雑な構造」をもち、そのことがまた「文明の進歩」を意味するものと見なした。しかし、彼がこうした近代の複雑な秩序が同時に「自然発生的に成長してきた」ものであることを強調している点も重要である。

ハイエクは、「われわれは、それぞれの領域でうまくいくことが証明された習慣や制度を頼りに、こうした常習的行為や制度を発展させてきた。…価格システムは…そうした形成物のひとつである。」(Hayek, 1986, Ch. 2)と述べ、近代のシステムが人間の「熟慮」の所産であるより、むしろ自然成長的に進化論的なあるいは穏和で漸進的な歴史的産物であると語る。つまり、文明の歴史とは進化の歴史であり、文明の進化とは拡大された複雑な秩序と同義であり、後者は私有財産と自由な諸市場に基づくものであった。そして、ハイエクによれば古代以来の文明の成長である私有

財産と諸市場の普及の歴史は政府の活動によってのみ中断されたのである。⁸⁾

ハイエクのこうした文明の進化概念は、トムリンソンによれば、彼が資本主義の穏和な歴史的進歩を語るのを可能にしたが、それは彼がモンテスキューやアダム・スミスのような18世紀の思想家たちに従って「資本主義の利己心の正当化が戦争や暴力の『情念』を抑制するだろう」と信じたからである。だが、トムリンソンはこうしたモンテスキュー=ハイエクの「利己心」の穏和な性格に関する信念を今日では「おとぎ話」にすぎないと一訣し、さらにハイエクが資本主義の出現を可能にした国家の決定的役割を無視している点をもあわせて批判している。⁹⁾

それはともかく、近代の社会秩序の複雑構造をハイエクは私有財産と広範な分業・交換を基礎とする市場秩序の問題と捉え、ついで、それを市場の成員たちによる競争行動として、またその競争を市場環境への適応のための新事実の「発見手続き」として、さらには価格システムをこの「発見手続き」に対する「信号(情報伝達)」機能として具体的に展開していく。そして、こうしたハイエク市場論に独特の色合いを与え、またそれを首尾一貫させているものが「人間の無知」を基調とするハイエク独自の知識論の展開である。

4. 無知とその適用

それでは、ハイエクが言うところの近代の市場社会における人間の無知あるいは知識の限界とは何か？まず注目すべきは、ハイエクが「人間理性の限界」という見地に依拠して自由の最重要性を強調していることである。「個人的自由を擁護する根拠は、われわれの目的と福祉の成就を支配する非常に多数の要素に関してわれわれがみな無知を免れがたいことを認める点にある。」¹⁰⁾しかし、それだけではない。ハイエクにおける人間理性の限界に関するこの見地は、彼が西欧近代における社会思想を二つの系譜に分かつ分水嶺であり、また、近代の「自由の諸制度」を人間の「無知の適用」と説明する彼独自の社会制度論や政策論に導く。その意味で、ハイエクの知識論は彼の社会分析の方法におけるもう一つの礎石をなすものといえる。

経済の領域における制度についての無知の意義への洞察、およびこの障碍を打破するために学んだ方法への洞察は、事実、本書で多面的に体系的

適用を試みた諸観念の出発点である。…われわれの行為を支配する行動ルールの大部分とその規則性から生まれる制度の大部分とは、社会秩序に入り込む全ての特定事実に関する説明をだれも意識的になし得ないということへの適用であるというのがわれわれの主要な論点の一つである。(Hayek, 1976, P.13, 22頁)

それはともかく、ハイエクは人間の無知が社会の構造のあり方に制約された無知であることを示すため、それを「ひとりの人間の知識と関心の構造的な限界性」と呼んでいる。それは、人間の無知を決定づけるのが社会の構造要因であり、とりわけその規模や複雑さだと彼が理解しているからである。ハイエクは、そのことをモンテスキューの『法の精神』やスミスの『国富論』のなかで論じられた未開と文明における人間の知的状況についての比較論¹¹⁾を想起させるやり方で、「原始社会の小集団」と「大きな社会または開かれた社会」の比較を通じて明らかにしている。それによれば、原始社会は小規模で単純なため各個人がその社会での出来事を等しく知っているのに対し、文明社会は大規模かつ複雑なため「各人は社会の営みの…大部分について無知である」というものである。そして、にもかかわらず、人が文明社会で「広範囲の目的を追求できる」のは「他人の知識から彼が受け取る便益がより大である」ためであり、それを可能にするものこそ市場の諸機能であり、とりわけ競争と価格システムの働きである。それでは、市場のシステムはどのような意味において人間の「無知の適用」なのか。ハイエクの知識論は彼の市場論においてどのような役割を果たすのだろうか。

すでに見たように、近代の複雑な市場社会においては、人間の知識は常に不完全であるというのがハイエクの知識論の中心的洞察である。彼はこのことを市場論においても繰り返し強調している。「合理的経済秩序の問題に特有の性格は、利用しなければならぬ諸事情の知識が、集中、統合された形態においては決して存在せず、全ての別々の個人が所有する不完全でしばしば矛盾する知識の分散された諸断片としてだけ存在する。」(Hayek, 1949, Ch. 2) 要するに、市場参加者の利用する知識は、「選ばれた専門家」の「科学的知識」と異なり、「特殊な事情に関する知識」であり、そうした主観的で部分的な知識は社会に広く分散し、市場のなかで分権的に利用されている。換言すれば、市場はそうした分散した部分的知識

の伝達・動員の用具に他ならず、またそうした市場機能を通す以外に経済問題の解決に必要な知識を社会のなかで利用する道はないということである。そして、複雑な市場活動に必要な知識が主観的かつ部分的な「現場の知識」(カーズナー流に言えば「市場—無知」)であるということは、そうした「現場の知識」を効率的な経済調整に結びつける制度的工夫が必要ということの意味する。こうした関心から、ハイエクは経済調整に必要な意志決定は現場の諸個人にゆだねられるべきこと、つまり経済の効率的調整のためには私有財産制度および計画と意志決定の分権体制が必要であると考へ、これとは反対の集権的意志決定の体制は必要な「現場の知識」を決して動員できないが故に失敗の運命にあると考へたのである。

社会の経済問題は、主として時とところの特殊事情における変化に急速に適応する問題である。とするならば、最終決定はそのような事情をよく知っている人たちに委ねられねばならない。この問題が中央当局によって解決されると期待することはできない。(Hayek, 1949, Ch. 2)

そして、こうしたハイエクの集権的経済計画批判で今日とりわけ興味深いのが、ソ連・東欧の改革の失敗と体制崩壊後の市場化政策のなかでハイエクの市場思想が大きな影響を及ぼすようになっていくことであり、そのことは「市場、競争、私有財産は解き難く結び合っており、それゆえ、市場調整が実際に効率的経済を生み出すのを保証できるのは資本主義経済だけである」¹²⁾と主張するヤノシュ・コルナイに典型的に現れている。

それはともかく、市場論への知識論のこうした適用がアングロアメリカの主流派経済学の「完全なる知識」の仮定に対するハイエクの批判において重要な役割を果たしていることも注目に値する。彼はNEW STUDIESの「12. 発見手続きとしての競争」の冒頭で、「40-50年あまり、経済学は全く面白くもなく、また有用でもない諸仮定に基づいて、競争を論じてきた」と述べ、経済学が競争論の前提に「完全な知識」を仮定してきたことを非難している。「もし経済理論がデータと呼ぶものについて誰でもが実際によく知っているとすれば、競争はこれらの諸事実への調整を確実にする方法としては、実際大変浪費的であろう。」(Hayek, 1978, p.179)と述べ、経済学がこうした仮定から出発する限り、それが市場無用論や競争不在論に行きつくのも当然のことだと批判した。また、彼は「社会における知識の利用」のなかでも次のように語っている。

もし、われわれが問題に関するあらゆる情報を所有するならば、…残る問題は純粹に論理の問題である。すなわち、何が利用できる手段の最善の使用であるかという問題に対する解答は、われわれの想定のかなかに含まれている。(Hayek, 1949, Ch. 2)

しかし、われわれは競争者たちの諸行為を決定する諸事情をあらかじめ知らないし、また市場関係者もその事情を十分知悉し尽くして行動するわけではない。むしろ、ハイエクによれば、市場のダイナミクスは、市場の競争者たちが「誰にも知られていないか、あるいは少なくとも利用されなかった諸事実」を「発見」し、それによって自らの当初計画を変更し、市場環境に適応していく過程であって、「競争」はまさにそのための「発見手続き」なのだ。ハイエクから強い影響を受けたイスラエル・カーズナーが、「市場プロセスが働きはじめるのは、それゆえ、市場参加者たちが、はじめの段階で、市場＝無知 (market-ignorance) であったためである。」¹³⁾と述べるのもそのためである。彼らによれば、要するに、主流派経済学の「完全競争モデル」は、(1)「完全なる競争」を前提することによって、市場プロセスの働きが停止した「均衡状態」を仮定し、彼らの市場論から競争とそこでの競争者（企業家）たちの役割を排除するとともに、(2)「完全な知識」の仮定によって、市場過程が「市場＝無知」による「体系的な計画変更」の過程であることを無視しているということになる。さらに、こうした市場＝無知論に基づいて主流派経済学を批判するハイエクの姿勢が、同時に全ての情報の集権的管理の用具を提供する経済学の計量的統計的手法への彼の一貫した拒否の姿勢と重なるのも当然であろう。ハイエクは、今日「経済学者」が市場の特殊状況についての知識の重要性を「忘れがちになる一つの理由」として、「彼らが統計的集計量にますます頭を占められるようになっていく」ことをあげている。(同上) ハイエクにとって市場で生産者達が日常的経済問題を解決するに必要とする圧倒的な知識は、そうした統計的知識や「科学的」知識では決してなく、いかなる中央当局にも「統計的な形式では伝達できない種類」のいわば「現場の知識」なのである。

このように、ハイエクは市場を、人間の全ての諸制度と同様、偶然性と人間の無知の故に「不完全な用具」と考えた。そして、こうした市場の不完全性という視角からハイエクは市場の最適な理

想モデルによって現実の実績を評価する主流派経済学の方法上の「不条理」をも厳しく批判する。その「不条理」とは、ハイエクによれば、この経済学が「市場が生み出す秩序」を「言葉の正確な意味での経済」として誤って取り扱い、また「市場過程の結果を所与の諸目的のヒアラーキーに奉仕する（「組織」の一筆者）基準によって判断する」という、第二節で説明したあの異質で相互に排他的な二つの秩序原理を同一視し、混同することにあつた。(Hayek, 1978, P.182) だが、そもそもわれわれは「競争によって発見する諸事実」をあらかじめ知らないのだから、「競争がこれらの諸事実を発見する上でいかに効果的か」についてわれわれは評価を下すことはできない。これに対し、競争の特質の評価として唯一可能なのは「市場が他のいかなるオルタナティブの諸調整に比べて優っているという事実」のみだとハイエクは述べる。

要するに、ハイエクの合理主義者や設計主義者に対抗する市場論の知識論的結論は、主流派経済学の「完全競争論」が主張するようには市場は完全ではないということ、また「市場はいかなる実行可能なオルタナティブよりも不完全さが少なく、また社会主義経済…よりも確実に不完全さが少ない」(Gamble, P.69)ということであろうか。そして、こうしたハイエクの市場論の背景には、人間性へのペシミズムあるいは絶望がある。彼は制度の形成や機能における人間理性の可能性や役割をほとんど認めず、人間の無知を一方的に強調していた。また、あとで見るように、彼は市場で行動する人間を本質的にエゴイズムの人格として描く。そのために、ハイエクにとっての経済問題とは単に自由市場における環境変化の問題であり、その解決（すなわち経済調整）はこのように変化する市場環境への諸個人の受動的な適応（あるいは服従）である。しかも、市場の実績は判断したり、評価したりすることはできない。しかし、われわれはハイエクのように人間を一面的にその無知と受動性においてのみ描く必要はないだろう。何故なら、伊東光晴氏も指摘しているように、「人間というものが自制的能力を持ち、自らの誤りを正し、向上する能力を持ち、敵対者を包容しながら、制度や社会のルールを改善させよう」¹⁴⁾と考えることもできるからである。

5. 競争と価格

ハイエクにとって、市場秩序におけるあらゆる

経済調整は「競争」と不可分である。つまり、近代の「社会における経済問題」が変化した市場環境への迅速な適応であるとすれば、競争は「局限された視野」の市場参加者たちが市場環境への適応に必要な諸事実を発見する過程なのである。彼らは、市場環境の不断の変化のなかで可能なあらゆる知識を利用し、新しい諸事実を発見し、彼らの計画や報酬の変更に基づいて市場に適応することを余儀なくされる。そして、この市場過程は市場環境の偶然と市場人間の無知の故に予測不能で、不確実である。競争の結果は「特殊な期待や意図を失望させ、挫くことも含む」。しかし、ハイエクによれば、こうした偶然と不確実による犠牲を伴いながらも競争は市場の諸個人の「意図せざる結果」として「一般的な利益」をもたらすものである。そして、ハイエクは市場競争の圧力がもたらすこうした経済効率の故に、競争を通じた経済調整は完全ではないとしてもそれに替わるべきオルタナティブな形態は存在しないと確信する。

ギャンプルは、諸個人や諸企業の間での競争を市場経済の本質的要素と見なした点で、ミーゼス＝ハイエクとマルクスは類似した見方をもっていたと指摘している。¹⁵⁾ たしかに、マルクスは資本間の競争が技術の飛躍的發展とグローバルな相互依存関係を生み出すという市場資本主義の革命的傾向を鋭く洞察していた。しかし、ギャンプルも指摘しているように、マルクスが市場資本主義をより高度な社会形態への過渡形態にすぎないとみていたのに対し、ハイエクたちは市場資本主義を複雑な近代社会にとって最高の発展可能形態であり、競争を他のものによっては代替不可能な効率的な経済調整機能と見なしたのである。ハイエクにとって、それゆえ、「高度に生産的な経済を意識的中央計画に結びつけるというマルクスの確信は幻想にすぎなかった。」(A. Gamble, P.70)

ハイエクは、「社会における知識の利用」のなかで、こうした彼独自の知識論と競争論を展開した後で、「価格システムなしに広範な分業を基礎とする社会を維持することはできるか」というかの「経済計算論争」のテーマをシュンペータを相手に再び論じている。シュンペータは、市場がない場合の合理的計算の理論的可能性を「生産要素の評価は消費財の評価付けのなかに含まれる」という論拠によって示していた。¹⁶⁾ ハイエクは、シュンペータのこうした見解の欠陥を彼の市場＝無知論に基づいて批判する。複雑な社会の「これら全ての事実を同時に知悉する一個の知性」にとってはそうしたことが可能であるかもしれないが、し

かし、経済の「全ての事実が一個の知性に与えられることは決してあり得ない。そして、その結果として、問題の解決は多くの人々の間に分散している知識が利用されることがどうしても必要である。」そして、こうしたことを可能にするのが市場の価格メカニズムなのだ。「複雑な社会における合理的計算のためには価格メカニズムが不可欠である。」(Hayek, 1986, Ch. 2)

ハイエクは、価格メカニズムが「情報伝達のための機構」であることを述べた後で、その最も重要な機能として、市場の「参加者たちが正しい行動をとることができるために知る必要があることがいかに少なくなくて済むか」ということを示す「知識の経済性」について述べるとともに、価格メカニズムがいかに効率的な働きを成し遂げうるかについて指摘している。つまり、1) 資源の利用を誰かひとりの人間の管理能力の範囲を超えて飛躍的に拡大できる。2) それにより意識的な管理の必要を大幅に省くことができる。3) 個々人に、望ましいことをさせるような誘因を与えることができる、というのがそれである。(Hayek, 1986, Ch. 2)

1920-30年代の「経済計算論争」についてのシュンペータの回顧とその評価は有名である。シュンペータは、彼の『資本主義・社会主義・民主主義』のなかで、この論争はミーゼスの反対者たちが勝利し、ミーゼスの「合理的計算なき社会主義は不可能」との主張は幻想であったと明言した。しかし、最近になって、経済自由主義の復活や「現存社会主義」の崩壊と共に、この論争は根本的に再評価されるに至っている。ギャンプルも指摘するように、90年代の今日、ハイエクが批判した集権的計画を未来社会の有望なモデルと考えるものはもはやほとんどいない。(Gamble. P.58) そして、この論争に関するヤノシュ・コルナイの次のような見解は現代の集権的体制に関する判断の典型例をなすものである。「50年を回顧するとき、人はハイエクが論争のあらゆる諸点で正当であったと結論できる。ランゲがさしだした希望は幻想であった。」(Kornai. PP. 476-7)

もともと、コルナイが「効率的経済を生み出すのを保証できるのは資本主義経済だけだ」という時、コルナイのこの結論は何とも陰鬱なご託宣であるというほかない。何故なら、ハイエクが語る市場過程の無慈悲も無視できないからである。ハイエクによれば、市場ゲームの結果は普通「勝者と敗者」であり、それには「功績がありながら、不運に見舞われる可能性」が伴い、それは不可避免的にひとびとの間に不平等をもたらし、「法外の失

望」を呼び起こす。「影響を受けた人々は、普通、完全な善意で、そしてまた正義の問題として、補正措置に対する要求を主張する。」(Hayek, 1973, P.127-8, 177頁。) そうだとすれば、市場のもたらす悲惨に対してハイエはどのように応えるか？ハイエクのそれに対する回答は価格メカニズムの「負のフィードバック」機能すなわち市場価格を参照とする敗者の「市場環境への適応」であった。

ある人が法外な失望状態におかれているにちがいないことを意味する負のフィードバックの原理が働く限り、(アダム・スミスはまたもはじめてこのことを明確に見た一人であった) 分散されている知識を有効に利用できる。…市場秩序を機能させるという点で、特定の価格と賃金もつ重要性は、価格がそれを受け取る人全てに与える効果によるのではなく、それが、彼らの努力の方向を変えるためのシグナルとして作用する人々に与える効果にある。¹⁷⁾

要するに、ここには、市場ゲームの敗者は市場価格に自らの賃金や商品価格すなわち報酬を合わせる(多くの場合、賃金の切り下げ)によって市場環境に適応できるということが示されている。それは変化する市場環境への諸個人の従属だけが市場における唯一の経済救済のあり方なのだということであろう。

全ての経済調整は、こうした偶然の変化によって必然的になされ…諸環境への諸活動の適応は報酬の変化に基づく。(Hayek, 1978, P.187)

ここには、市場の競争ゲームの否定性をも市場秩序の健全な機能の一環と捉えるハイエク市場論の「無慈悲な鋭さ」が示されている。ハイエクの「負のフィードバック」の逆説すなわち市場競争の敗者の報酬切り下げによる「市場環境への適応」という論理は、われわれにピオーリがかつて「過酷なコスト削減モデル」と呼んだネオ・コンサヴァティブの市場戦略を想起させるに十分である。¹⁸⁾そして、この戦略は、「他のいかなるオルタナティブの諸調整も市場に優るものはない」(Hayek, 1978, P.180)というハイエクの言明に見られる市場競争の絶対化と不可分のものであった。ハイエク＝コルナイのご託宣に対して、ラスキ&ブルスがケインズ＝カレッキー的アプローチに立って「市場社会主義は、自由放任システムと同一視される必要はない」と主張し、(ラスキ&

ブルス、180頁)ピオーリ & セーブルがネオ・ブルドニアン・アプローチに立脚した「競争と協同」モデルによってハイエクの競争万能主義に応えたのも故なしとしない。¹⁹⁾そして、70年代以降のハイエクのあらゆる無慈悲な政策提言もまたここから生まれてくる。事実、ハイエクは「変化する環境への諸活動の適応」という見地から、「社会的正義」と呼ばれるもののために「諸価格や諸所得を修正する政策的努力」は「市場秩序の基盤を破壊することなしには一般的に実行不可能な原理である」と主張し、「幾つかのグループにおける地位の絶対低下」を回避しようのは、ただ「急激に成長するシステム」においてだけだと突き放している。(Hayek, 1978, P.187)

ギャンプルが、合理主義者や構成主義者に対抗するハイエクの市場理論のポイントが「市場は完全であるというのではなく、利用可能ないかなるオルタナティブよりも不完全さが少なく…また社会主義経済よりも確実に不完全さが少ないということ」にあると論じているのは正しい。だが、にもかかわらずハイエクがことあるごとに社会主義はおろか、マクロ経済政策や社会政策をも自生的な市場秩序を破壊する「つくられた秩序」の「組織」の原則として徹底的に排除するその異常さと彼が示した盲目的な市場競争信仰も見逃すべきではなからう。そして、ハイエク市場論のこうした側面の背後にあるのが人間のエゴに立脚した彼の厳格な個人主義のイデオロギーであり、またそうしたイデオロギーの展開を首尾一貫させた彼の方法論である。そこで、次にハイエクの個人主義的方法論の諸問題を見ることにしよう。

6. 個人主義とスミス

上に見たように、ハイエクは「経済計算論争」以降、主流派経済学から距離をおき、それと対決する方向に向かった。しかし、このようにハイエクが新古典派経済学と対決する姿勢を強めていったとしても、ハイエクがこの経済学を全面的に否定する姿勢をとったわけではない。そのことは、「われわれの体系において、均衡分析が果たす有益な機能を否定しない。しかし、均衡分析は社会過程を少しも取り扱わない。」(Hayek, 1949, Ch. 2)というハイエクの言葉によっても明らかである。そうだとすれば、ハイエクがこのように新古典派経済学に対し融和的姿勢をとるのはなぜなのか？

それは、ハイエクが市場理解の根本において新

古典派経済学と共通認識に立っているからである。プレビッシュも指摘しているように、ハイエクは市場理論において新古典派と共に「最高の経済的調整者としての市場（競争）」という信念を共有している。それ故、彼らは共に競争のいかなる制限も、またその結果としての所得分配へのいかなる介入も市場の効率的な作用を歪曲し、妨害するものとしてそれらを攻撃したのである。²⁰⁾

そうだとすれば、ハイエクと新古典派が「最高の経済的調整者としての市場（競争）」という信念を共有したのはなぜか？それは、彼らが共に同じ個人主義的経済思想の系譜に属し、同じ思想史的背景をもつからである。彼らは、自らの市場に関するインスピレーションをアダム・スミスの著作とりわけ彼の「利己心」に関する見解から得たと理解しており、またそのことを自らの経済思想の正統的根拠ともしているのである。それ故、スミスの「利己心と見えざるの手」の論理をから出発するハイエクの市場理解が、例えば新古典派の「急進的自由主義者」であるフリードマンのこれまたスミスの同じ論理に依拠する市場理解とその基本的な特質においてピッタリと重なるのも故なしとしないのである。フリードマンの次の一節は、スミスの「利己心と見えざるの手」に依拠する自らの市場論の個人主義的というよりも利己主義的な特質を端的に示している。

アダム・スミスの天才のひらめきは、以下のことを彼が認めた点にある。つまり、売り手と買い手、要するに自由市場における自発的取引に由来する諸価格は、各人が自己自身の利益を追求する数百万の活動を全ての人々を富裕にするような仕方、調整することができる。経済秩序は、自己自身の利益を追求する多数の人々の諸活動の意図せざる結果であるということは、まさに当時としては驚くべきことであったが、今日においても依然そうなのである。…価格システムは、大変うまく効率的に働くので、われわれはほとんどそれに気がつかない。われわれは、その機能が妨げられるまでは、それがいかにうまく機能するかを理解しないし、また後者の場合でさえ、そのトラブルの原因をめったに認識しない。²¹⁾

フリードマンの自由放任の市場論をプレビッシュのやや風刺的な表現で示せば、「(利己心に基づく一筆) 経済諸力を自由に作用せしめよ。企業と労働者の活力を歪曲する諸制限を撤廃し、保護関税その他の国際分業への障碍を捨てよ。そう

すれば、あらゆる側面で繁栄と分配的正義が生ずるのであろう。」(Prebish, P.153)ということになる。

ハイエクもまた、アダム・スミスの「利己心」に関する見解を再解釈することから出発している。それというのも、彼がそこに近代社会の繁栄現象（具体的には人口増加によって示される）を生み出す主体的原因が「利己心」にかられて行動する「諸個人」にあると考えるからである。そこで彼は「人間の無知」という彼独特の知識論によりながら「利己心」によって行動する諸個人が市場の作用を通してどのように「社会の共同目的」に貢献するように導かれるかを明らかにしている。

ハイエクは、かつて「人間の利己主義を是認し、鼓舞した」との悪評にさらされたスミスの「利己心」を、近代の大きく複雑な社会構造においては不可避的な「議論の余地のない一つの知的事実」すなわち「1人の人間の知識と関心の構造的限界性」に基づくやむを得ない「人間の関心」として正当化している。ハイエクはまた、この「利己心」の概念が含む「本当の問題」は、「人間が利己的動機に導かれるかどうか」ではなく、「人間の行為を事実において決定するこのような限定された関心」が「社会の共同目的」にできるだけ多く自発的に貢献するように彼をしむけうるか否かにあるとした。その上で、彼は「個人主義の偉大な著者」あるいは「古典的経済学者」によりながら、この「利己心」に基づく諸個人の行動を公共目的に貢献させる効果的な誘因が「私有財産制度」であり、またそのように諸個人の行動を導くものが「市場」であると、市場が達成する利益を強調した。ハイエクによれば、これこそが、ジョサイア・タッカーとアダム・スミス、アダム・ファーガソン、エドモンド・バークの「大いなる主題」であり、古典経済学の「大いなる発見」であった。

個人主義の偉大な著者たちの主たる関心は、実際、人間が彼自身の選択によって、そして、彼の日常行動を決定する諸動機から、他の全ての人々の必要にできるだけ多く貢献するように誘引されるような一揃いの制度を見つけることであった。そして、偉大な著者たちは私有財産制度が従来理解されている程度をはるかに越えてそのような誘因をまさしく与えることを発見した。(Hayek, 1949, Ch. 1)

ハイエクは、さらに彼が「個人主義の偉大な著者たち」から得たと考えるこうした市場秩序の本質的諸要素に基づいて、近代社会の複雑な諸現象を分析する自らの「個人主義的方法」を以下のように要約している。

他人に向けられかつ他人の予期される行動によって規定される諸個人の行為をわれわれが理解することを通す以外には社会現象の理解への道はない。……われわれは、諸個人の諸行為の複合的効果を追跡することによって、人間の様々な偉大な土台をなす制度の多くが、設計し指令する知性なしに生成しかつ機能しているのを発見する。アダム・ファーガソンが述べたように、「諸国民は人間の行為の結果であるが、人間の設計の結果ではない諸制度に出会わす。」自由な人々の自然発生的な協力は個々人の知性が完全には理解できないほど偉大な事物をしぼしぼつくり出す。

この議論の鋒先は社会やその他の社会的な全体的存在をそれらを構成する諸個人とは独立に存在する特殊な実体として直接に把握できると主張する本来の集産主義に向けられている。しかし、社会の個人主義的分析の第二步は、これもまた事実上の集産主義に導く合理主義的疑似個人主義に向けられる。(Hayek, 1949, Ch. 1)

ハイエクのこの方法をキャンブルは「方法的個人主義」と呼んでいるが、それは要するに、1)社会現象を生み出す唯一の要因を他人との相互的關係のなかで利己心によって行動する諸個人と捉え、2)制度の生成とその機能を「諸個人の行為の複合的効果」(「意図せざる結果」)によるものとし、3)その結果は「偉大な事物」の創出であるとするものである。ハイエクの市場論だけでなく、彼の壮大な近代社会論に首尾一貫性を与えることを可能にしたものこそ彼のこの個人主義的方法であったが、その方法の根底には、諸個人のあらゆる経済行動を決定するのは「利己心」だという彼の人間観が横たわっている。しかも、この人間観と方法は新古典派経済思想の基本を成すものでもあったが、実はこうした思想こそが「利己心」に関するアダム・スミスの見解に淵源し、かつその継承に由来するものであった。そして、この方法から、例えば完全雇用政策の廃止論や社会保障制度の解体論のような、無慈悲で極端に一面的なハイエクと新古典派のあらゆる政策提言が生まれるのであるが、そのことについては後に詳論するであろう。

それはともかく、こうしてハイエクやフリードマンは「利己心」に関するアダム・スミスの見解を継承し、近代の市場秩序の本質的要素を「利己的関心」によって行動する諸個人に求めることから出発した。そして、こうした諸個人の行動が市場の作用を通じてもたらす利益と業績を賞賛したのである。だが、こうしたスミス解釈に基づくハイエクやフリードマンの市場論はどの程度まで正当であろうか?問題は、二面的である。つまり、この方法が思想史的方面と経験科学的分析の双方において、はたしてどの程度の妥当性をもつであろうかということである。前者の側面については、私は別の機会にハイエクのアダム・スミス解釈の歪曲性とそれによる市場理解の極端な一面性をD・ウィンチやトムリンソンによりながら「敵意と信仰の二分法」として批判しておいた。すなわち、ハイエクは「市場秩序のゲーム」とそこでの「交換的正義」や「個人的自由」を絶対化し、社会的経済的正義を「空虚なもの」として排除する。ハイエクがそうすることができたのは上に見てきたような一面的で、歪んだスミス解釈に基づくものであった、と。²²⁾だが、その際、ハイエクによる解釈の歪みをスミスの倫理・経済学説の全体を視野に入れて十分にたずさすことはできなかった。(前掲拙稿の7)その意味で、今日非常に興味深く、またスミスの経済・倫理学説とりわけ彼の「利己心」に関する見解の真の意義を理解する上できわめて示唆的であると思われるのは、『アダム・スミスの失敗—なぜ経済学にはモラルがないのか』(1990)におけるK・ラックスのスミス解釈であろう。²³⁾

ラックスは、その第5章において、スミスの錯誤と功績についてほぼ次のように論じている。スミスの「利己心と見えざる手」についての見解は、「シニカルで、かつ純真にすぎる。」また、この見解は、イギリス産業革命後の悲劇と南北戦争以後のアメリカのビジネス史、「利己心の支配する経済」における「企業が独占を求めて繰り広げる戦争のような様相」、「利己心が競争を弱める力」など、歴史的諸事実に照らして誤っている。しかし、ハイエクたちがやるような「利己心」や「自由放任」の絶対化はもともとスミスの本心ではなかった。むしろ、スミスの「利己心の勧めは反利己心の勧め」でもある。彼は「大衆の生活改善」のために「大衆の利己心を喚起」したが、それは同時に「貴族政治の利己心」が引き起こす「大衆の権利の侵害に抗するため」であった。スミスの「自由放任」が究極企図したことも、労働

者の生活水準の向上と人民の利益に反する勢力の弱体化にあった。それ故、スミスは利己心や自由放任をハイエクやフリードマンのように絶対無条件のものとは考えなかった。むしろ反対に、スミスは、美德や他者への評価、思いやり、共感、正直さ、公正さ、誠実さなどの「利己心を抑制する力」を通じて「社会的、経済的な善」は達成されるものと考えた。ケネスは、この点で『国富論』よりも『道徳感情論』の方が優れていおり、特に後者の大改訂の含意は重要だと強調している。こうしたスミス倫理・経済学説の検討を通じて、ケネス・ラックスは、新古典派の経済学者たちがエゴイズムをその方法の根底に絶対的なものとして据えることによって、いかに「最も深刻かつ最も根本的な誤認」を犯してきたかを次のようにのべている。

経済学者たちは、目前にある現代の経済社会がもたらした利益と業績を「利己心」と「自由放任」の産物と教えている。しかし、このような見解こそ、われわれの文化における最も深刻かつ最も根本的な誤認である。(ラックス, 第5章)

ともあれ、こうしてハイエクや新古典派のフリードマンたちは共にアダム・スミスの「利己心」に関する見解から出発し、「最高の経済的調整者としての市場（競争）」という確信に至った。そして、最高の調整機能としての市場競争という信念から、彼らはそれを制限するもの、なかでも労働組合の市場支配力を攻撃し、また「社会的正義」の名による政府の再分配政策を非難する。シカゴ大のフリードマンもリバプール大のミンフォード²⁴⁾もそしてわがハイエクも、市場競争を制限する元凶として企業独占よりも労働組合の支配力をあげたが、彼らが共に声を大にして強調したのは、何よりも労働勢力の権力が未組織労働者の仕事と所得を奪うということであった。ちなみに、「失業の治癒」に必要な不可欠の条件は労働市場の「フレキシビリティ」であると確信するが故に、彼らは政府の完全雇用政策と労働組合の「強制力」及び失業補償制度がそれを妨害すると非難した。また、彼らが共に「福祉国家」の有害性と危険性を強調したことも有名である。フリードマンは彼の『資本主義と自由』や『選択の自由』の中で、「政府の活動を法と秩序の維持に限定すべきだ」と主張して、戦後福祉国家政策の解体を要求した。²⁵⁾ハイエクは、フリードマンほどの「硬直的な立場」はとらないとしながらも、

やはり同様に「社会正義」の名によって企てられる集権的に決定される所得の再分配と社会保障制度の多くは、自由とその秩序を破壊するものであるとし、廃止されなければならないと主張した。(前掲拙稿の5)

7. 市場分析の根本問題

このようにハイエクは競争への制限をひたすら攻撃したのであったが、そのことは彼が、新古典派と共に、スミスの「利己心」に関する見解を一面的に解釈し、しかもそれを一般化する「方法的個人主義」から出発し、市場競争を「最高の経済調整者」として絶対的なものと見なしたからであった。

だが、「最高の経済調整者としての市場競争」というハイエクの新古典派的前提には、単に思想的妥当性の問題があるだけではない。そこには、さらに経験科学的妥当性の問題もある。プレビッシュにいわせれば、ハイエクのこうした前提を事実の上でも妥当として承認する限り、人は彼の首尾一貫した市場論のその後の展開全てを承認せざるをえなくなるであろう。しかし、プレビッシュは、ハイエクのこの前提が低開発社会の経験的事実の世界に照らして、「絶対に妥当性をもたない」という。それは何故か？

プレビッシュの主張するところは二点である。第一の問題は市場過程の結果としての分配は正当であり、また不可侵だというハイエクの分配論がもつその形式性と外面性である。ハイエクは政府の介入による所得の「再分配」が市場の作用を歪めるとするが、プレビッシュによれば、ハイエクは分配の恣意性が市場過程の結果それ自体つまりは生産成果の第一次の分配それ自体によってすでに生じうるという事実を無視している。

ハイエクの場合、所得分配における障碍は…市場法則の作用を妨害するような社会的諸グループが存在するという事実による。しかし、問題はもっと以前に始まる。私は、最初の領有の恣意性に権力諸関係が働くなかで、再分配の恣意性が続くというべきかも知れない。そして、この分配のための闘争において、規制原理が全く存在しなかったので、システムはかくて危機の方向へ推移する。(Prebish, PP. 166-7)

方法的個人主義に基づく「最高の市場機能」というハイエクの信念が事実の分析において妥当性

を持たない第二の理由は、彼が市場の諸問題を「システムのダイナミックス」の問題としてとらえないと言うことにある。「周辺の立場」から経済発展を考えるプレビッシュにとって、「システムのダイナミックスは、基本的には、不断に成長するための剰余の必要にもとづく。」(Prebish, P.166)つまり、低開発社会の経済的自立と安定にとって経済的剰余の存在が不可欠のものであった。

ところで、プレビッシュによれば、これも新古典派理論一般に言えることであるが、ハイエクは「競争の働きによって排除されない剰余の存在」、とりわけ「生産手段を集中している人々によるその領有」を否認する。「競争の働きによって排除されない剰余の存在とその領有」は新古典派にとって「恣意的」であった。こうしてハイエクは、経済剰余の存在が低開発社会の経済的自立と安定にとって不可欠であるという事実にはいっこうに関心を示すことなく、その鋒先を「市場法則の作用を妨害する社会的グループ」とりわけ労組の団結力と恣意的な所得移転を指図する「議会の多数派」に向け、競争の抑制と所得の恣意的移転を阻止するために「憲法の制限」に訴えた。しかし、こうしたハイエクの論法は、プレビッシュにとって、低開発社会における「墮落したシステム」の存在と(Prebish, P.167)そこでの経済的自立に必要な剰余拡大→資本蓄積の重要性という事実を無視するものであった。低開発社会に今日必要なことは、プレビッシュによれば、ハイエクの主張するような「明らかに労働勢力に不利な権力構造の後ろ向きの変革」などでなく、「剰余の社会的使用のために、その重要部分を領有し、保有する人々に不利な権力構造の進歩的変革」(Prebish, P.169)である。

要するに、所得分配問題において、ハイエクは市場の最高の調整機能とその防衛に執着したがために、彼はシステムにおける分配や剰余の蓄積の役割に無関心となった。だが、プレビッシュによれば、経済の発展と衰退の問題は低開発経済においても「社会構造を考慮することなしには説明できない」のである。(Prebish, P. 167)

以上、プレビッシュによりながら、「最高としての市場機能」というハイエク市場論に伏在する諸問題を見てきた。だが、振り返ってみて、プレビッシュによるハイエク批判は必ずしもハイエク市場理論のうちに見られる知識論や方法論と十分にかみ合っていたとは必ずしも言えない。たとえば、プレビッシュによる集計概念としての「剰

余」の強調とハイエクによる計量経済学的「科学信仰」批判や、「システムのダイナミックス」についてのプレビッシュの主張と有りもしない理想状況のモデルによる市場過程の実績評価へのハイエクによる批判は、ともにすれ違ったままである。だが、この場合においても、市場の諸個人の部分的断片的知識(「特殊状況の知識」)のみが妥当とし、集計概念や統計的知識を排除したり、また誰も市場の「意図せざる結果」を判断できないとするハイエク知識論の徹底したベシズムや人間のエゴに基づく彼の個人主義的方法の一面性があらためて問題となろう。

8. むすび

ハイエクの市場論とその方法についての検討をむすぶにあたって、ハイエクの市場論に見られた顕著な特徴のいくつかを振り返ってみることにする。そこで、第一に印象的であったのは、いわゆる「経済計算論争」に淵源する社会主義との対決と市場秩序の擁護という彼の政治的・イデオロギー的な批判視角がいわば「敵意と信仰」という形をとって彼の市場をめぐるあらゆる議論を貫いていたということである。組織と自生的秩序、科学的知識と特殊の知識、意志決定の集権制と分権制、均衡と競争、市場過程とマクロ政策等々。

ハイエクのこうした市場論の展開に首尾一貫性を与えることを可能にした彼の人間観と方法論にも顕著な特徴が見られた。まず、ハイエクの人間理性への徹底したベシズムがあった。そして、こうした人間理性への絶望から、彼は自然発生的な秩序としての自由競争市場への人間の服従を人間の運命と見たのである。また、ハイエクの新古典派への厳しい批判姿勢にもかかわらず、彼が新古典派と市場に関する根本理解を共有した背景にはエゴイズムを人間行動を決定する根本と理解する彼の個人主義的方法論があり、しかもその方法は「利己心」に関するアダム・スミスの見解の一方的な解釈とその継承に由来するものであった。そして、この方法から、例えば、完全雇用政策の廃止論や社会保障制度の解体論のような、無慈悲で極端に一方的な彼のあらゆる政策提言が生まれ得たのである。

ハイエクのイデオロギーと方法論の諸前提をふまえて、いま再び彼の市場論を振り返れば、そこに、ハイエクの強みと弱みもまた明らかとなろう。ハイエクの市場理論の強みの一つは、彼が、その知識論と個人主義的方法とに基づき、競争過

程にある諸個人の具体的観察を通して、市場の諸特徴を発見手続きとしての競争の機能として、情報伝達機構としての価格メカニズムの機能として、市場における経済調整を環境への諸個人の服従として、さらには市場の動態的過程として無慈悲にかつ鋭く捉えることができたということにあらう。そのことによって、彼はまた新古典派市場理論における諸仮定の虚構性を暴露することにも成功したのである。ギャンブルは、これとは別のハイエク市場論の強みとして、彼が市場資本主義が可能とする「分権化した意志決定」の積極面を賞揚した点をあげている。ギャンブルは、その際、オーストリアンの諸概念は新しい社会主義の発展に寄与することができ、とくに両刃の剣であるハイエクの知識論は広範な参加と自己決定の可能性を制限する資本主義への権力集中の批判に利用できるとして、ハイエクの分権思想を高く評価している。

だが、ハイエク市場論には、決定的な弱みがあるように思われる。その第一は、ハイエクが人間性への懐疑や絶望によって、人間の理性の可能性や自己改善能力や社会的あるいは道徳的能力の有効な働きを一切認めなかった点にある。こうして、彼は人間の社会的自己組織化と市場環境への

適応とを両立させる道を模索するというより、むしろ市場環境への人間の一方的な適応すなわち服従を唯一の経済調整のあり方だと主張したのであるが、それは彼の人間の悲惨への無関心と不可分であった。さらに、反社会主義イデオロギーと個人主義方法論の結合に基づく「敵意と信仰の二分法」が果たしたハイエク市場論の負の側面がある。彼は様々な経済学的諸範疇をこの二分法によって再定義しながら自らの市場理論を構築したのであるが、その外在的かつ形式的なやり方は彼が得意とした近代社会の複雑構造の分析を極端に一面的なものにし、かえって彼自身を盲目的にしたのではないかと思わせるところがあった。先の「最高の経済調整者としての市場（競争）」という彼の信念の諸問題がそれを示している。

以上、ハイエク市場論とその方法について、いくつかの特徴的論点を振り返り、その意義と問題について見てきた。しかし、この小論ではハイエク市場論について他に論ずべき多くの論点が残された。とくに「経済計算論争」のなかでのハイエクの主張の具体的な内容や「競争」をになう「企業家精神」について詳論できなかった。他日を期したい。

(注)

- 1) 拙稿「ハイエクによる福祉国家批判と市場秩序の防衛」『福岡教育大学紀要』1995, 第44号。Ramesh Mishra, *The Welfare State in Crisis*. 1984. p.22。
- 2) 鈴木興太郎「計画・市場・規制」『書齋の窓』1994・1・2。
- 3) W・ブルス&K・ラスキ著/佐藤・西村訳『マルクスから市場へ—経済システムを模索する社会主義』岩波書店, 1995。Andrew Gamble, *HAYEK: The Iron Cage of Liberty*. Polity Press, 1996. Chap. 3.
- 4) F. A. Hayek, *Individualism and Economic Order*. Routledge & Kegan Paul, London, 1949, Ch. 1 / F・A・ハイエク著『市場・知識・自由』ミネルヴァ書房, 1986, 第1章。
- 5) F. A. Hayek, *Law Legislation and Liberty I*. Routledge & Kegan Paul. London, 1973, P.50-51. / F・A・ハイエク著『法・立法・自由I』春秋社, 67頁。ハイエクの著作については以下本文に出版年と原著および邦訳の頁を略記。
- 6) F. A. Hayek, *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and The History of Ideas*. Routledge & Kegan Paul, London, 1978, chap. 12.
- 7) トム・B・ボットモア著/小澤訳『近代資本主義の諸理論』亜紀書房, 1989, 98頁。
- 8) Jim Tomlinson, *Hayek and the Market*. Pluto Press, 1990. Ch.3.
- 9) Tomlinson, op. cit. P.48. 「資本主義的利己心の穏和性」をめぐる思想史については、アルバート・O・ハーシュマン著/佐々木・旦訳『情念の政治経済学』(法政大学出版局, 1985)を参照。また、資本主義の発達における国家の役割に関しては、古くはマルクスの「いわゆる原始的蓄積」論があり(K・マルクス著『資本論』第一巻, 1976, 第二四章), もっと下れば, K・ボランニーの「自由放任経済は意識的な政府活動の所産であった」との主張による「自由主義哲学における自然

成長信仰」への反駁が有名である。さらに、この百年にわたる文明の進化論的過程の停止または逆転は集産主義イデオロギーの出現と国家干渉のせいだとするハイエク流の福祉政策批判に対し、19世紀末以降の「自由放任の規制」こそが「自然発生的」であったのだとするポランニーの反論も興味深い。(K・ポランニー著/吉沢ほか訳『大転換—市場社会の形成と崩壊—』東洋経済新報社、1975、第12章)なお、ハイエクとポランニーとの市場観の対立については、高橋正立「経済とは何か：ポランニー対ハイエク」、『経済論叢』京都大学経済学会、第138巻第3・4号を参照。

- 10) F. A. Hayek, *The Constitution of Liberty*. Routledge & Kegan Paul, London, 1960, P.29./F・A・ハイエク著/気賀・古賀訳『自由の条件1』春秋社、47頁。
- 11) 越智・小野・関編著『社会経済思想の展開』ミネルヴァ書房、1990、第4章。デュルケーム著/小関・川喜多訳『モンテスキューとルソー』法政大出版局、1996、第3・4章。モンテスキュー著『法の精神』第3篇5・7・17章。アダム・スミス著『諸国民の富』第5編第3部。拙稿「スミスの自然法学と商業社会の逆説」『福岡教育大学紀要』1988年第37号、29-30頁を参照。
- 12) J. Kornai, *The Socialist System*. Oxford : Clarendon Press, 1992, Ch. 21. および A. Gamble, *HAYEK*. Ch. 3.
- 13) イスラエル・カーズナー著/田島・江田監訳『競争と企業家精神』千倉書房、11頁。
- 14) 伊東光晴「資本主義の変貌と21世紀」、『世界』1997年10月号所収。
- 15) A. Gamble, *HAYEK*. P.32. (Cf.) D. Lavoie, *Rivalry and Central Planning*. Cambridge University Press, 1985.
- 16) シュンペーター著/中山・東畑訳『資本主義・社会主義・民主主義』(中) 東洋経済新報社、1962、318頁。
- 17) F. A. Hayek, *Law Legislation and Liberty II* . Routledge & Kegan Paul, London, 1976. P.103./F・A・ハイエク著/『法・立法・自由II』春秋社、1987、71頁。
- 18) M・J・ピオーリ/日本福祉大学社会科学研究所訳「大量生産と伸縮自在生産と経済的繁栄の復活」1990。Jim Tomlinson, *Employment Policy*. Epilogue の〈1985年白書の基礎〉を参照。
- 19) M・J・ピオーリ & C・F・セーブル著/山之内他訳『第二の産業分水嶺』筑摩書房、1993、第2章および第10章。拙稿「産業テクノロジー・調整システムおよび現代経済危機」、岡村・佐々野・矢野編著『制度・市場の展望』昭和堂、1994、終章。
- 20) Raul Prebisch, Dialogue on Friedman and Hayek : From the standpoint of the periphery. *CEPAL REVIEW*, December, 1981, P.164.
- 21) M & R・フリードマン著/西山訳『選択の自由』日本経済新聞社、1980、第1章。
- 22) Jim Tomlinson, op. cit.. D・ウィンチ著/永井・近藤訳『アダム・スミスの政治学』ミネルヴァ書房、1989。
- 23) ケネス・ラックス著/田中秀臣訳『アダム・スミスの失敗—なぜ経済学にはモラルがないのか』草思社、1990。
- 24) Patric Minford, *The Supply Side Revolution in Britain*. 1991, Ch. 5.
- 25) M・フリードマン著/熊谷、西山、白井訳『資本主義と自由』マグローヒル好学社、1975、第2章の結論および前掲書、第4章を参照。